

母の思い

金沢区支部 加藤 浩之（子）

戦没者 加藤 嶋三郎

戦没地 硫黄島

父の声が聞きたい、父の温もりを知りたい、叶わぬ夢である。そして、「子の声を聞きたい、子の温もりを今一度確かめたい」と願って死んでいったであろう父の面影が、洋上千二百キロメートルを隔てた浜辺を結んで、再び会うことの出来ない二つの命が通い合う。

「父は昭和二十年三月十九日、硫黄島で戦死しました」もの心ついて初めて覚えさせられた言葉である。それ以外の言葉を思いつかない。母に手を引かれ、会う人に「お父さんは」と聞かれればそう答えるように教えこまれ、ハキハキと答えた。賢い子と誉められ、「お母さんの言うことをよく聞いて、早くお母さんを楽にしてあげてね」と励まされ、一家の小さな大黒柱を背負ってきた。子供に辛い思いをさせたくないと頑張る母と、それに応えようと頑張る子の二人三脚である。二つ上の姉も又、母を助けて必死に自分の生きる道を探し求めていた。

母は、父についてほとんど語らなかつた。辛い思いをさせたくないの一言に全てを呑み込んで、日銭を稼ぎ、日毎の糊口を凌いだ。夏の炎天下での畑の草刈り、冬の凍てつく海での拾い海苔、

粉じんの中での肉体作業、時と場所を選ばず働き通してきた。「戦争」という憎しみを黙って背負って生き抜いた。目に入れても痛くない、三人の孫に母親らしい子育てを心安らかに楽しみ、平和の有難さを噛みしめ、四十年ぶりのデートに胸はずませて旅立って逝った。

母を送って還暦も過ぎ、中卒で勤めた会社を無事定年退職、今はのんびりと老後を楽しんでいる。その会社が父の勤めた海軍工廠の跡地であったことを入社後に知り、どこかで繋がっている親子の絆を大切に、今は父が好きだったと聞かされていた祭囃子の太鼓に熱中している。あの戦争が無かったら祭りの山車でいっしょに太鼓を楽しむことが出来ただろう。ささやかな親と子の夢である。夏の一夜、暗闇の中に風に乗って聞こえてくる遠音に親子の撥を重ねてみる。そんな思いを繰返し、せめて子供にいくつかの夢を叶えさせてあげたいと、戦争の苦しみを黙して必死に生きてきた「母の思い」をたどり、平和の尊さを噛みしめている。